変容した戦後の大学登山クラブ

― 山岳部からワンダーフォーゲル部へ ―

城　島　紀　夫

日本山岳文化学会論集　第11号

2013年11月

変容した戦後の大学登山クラブ

——山岳部からワンダーフォーゲル部へ——

The postwar university mountaineering clubs transformed.
— From Alpine Club to Wandervogel Club —

終戦前までに学生登山と呼ばれていたものは、大学の山岳部に所属するごく少数の学生たちが趣味として行っていた登山活動であった。

太平洋戦争の敗戦に伴ってわが国は連合国の占領下におかれ、その時期に行われた諸施策はわが国にとっては革命的と言えるほどの大変革であった。戦前の教育体系や教育内容など数多くのわが国の文化が断絶状態になり、学生登山の連続性も絶たれた。

戦後は登山を愛好する多数の学生たちがワンダーフォーゲル部に入部して戦前にはなかった形式の登山活動を行うようになり、大学生の登山の主流となった。戦後のワンダーフォーゲル活動を新しい登山の現象であったと捉えて、その発展の状況と当時の社会情勢を照応させて論述する。

城島 紀夫 (東京都) Norio Jojima

日本山岳文化学会登山史分科会

はじめに

戦前の学生登山と呼ばれるものは、旧制の大学、高等学校、専門学校、高等師範学校の中において組織されていた旅行部、スキー部、山岳部などの活動を指していた。

戦前と戦後の学生登山を比較するために、終戦直後（1945年）から起こった激変の時代を振り返り、大学登山の変容の背景として俯瞰することから始めたい。

戦後の教育改革は、わが国にとって1872年以来はじめての根本的な改変となった。この結果、大学生の質や大学卒業者が社会に占める位置も大きく変わった。

本論は、終戦直後に発生して興隆した大学ワンダーフォーゲル部の発展の経過ならびにその意義について、昭和期の最後にあたる1989年までの間を対象として考察したい。

1. 教育制度の改革と大学の変容

1-1 戦後改革

1945年8月の終戦によってわが国は連合国軍の占領下におかれ、以後6年間は国政がすべて占領行政のもとにあった。

この間に実施された諸改革には、財閥の解体、農地改革、教育改革などがあった。「日本教育制度の管理に関する指令」に基づき1947年に教育基本法ならびに学校教育法が公布され教育制度の大改革が実施された。6.3.3.4制と男女共学の始まりである。

1-2 学校体系の改革

まず新制中学校ならびに新制高等学校が発足し、続いて1948年から1949年にかけて新制大学制度の運営が始まった。

教育制度の変更の衝撃の大きさについては、文部省『学制百年史』に次のように記されている。

「この間に急速に実施された教育改革は戦時下

の教育の後を受けた特殊な方策によるものであって、常時の教育改革と同様にみることはできない。」[1]「明治5年学制発布以来の大きな改革となった。」[2]

中学校、高等学校が単線の学校制度となった。旧制の中学校制度は中学校、高等女学校、実業学校の3つの種別がある複線型制度だった。

高等教育も旧制では大学、大学予科、高等学校、専門学校、高等師範学校、女子高等師範学校、師範学校、青年師範学校があったが、新制度ではこれらを単一の4年制大学に単線化した。

旧制大学は3年制であったが、大学予科と高等学校とを前期教育機関としていたので、これを連結すると5年または6年の課程をもつ高等教育機関であった。この様な前期課程を持つ旧制大学が単なる4年制の新制大学になったことで、新制大学は高等教育の学校体系としては階段を一つ下がって、高専から改編された新制大学と同格になったのである[3]。エリート教育が壊滅したと言われる所以の一つである。

1-3 新制大学

新しい大学制度は、教育の大衆化を進めることが眼目であった。在来のエリート育成制度を、高度に中央集権化された教育制度であったとして全国の各都道府県に国立大学を置いて教育の地方分権化を図ると同時に、教育の機会均等を図る単線型としたのであった。欧州などでは今日も複線型教育体系が続いている。

男女共学が基本とされた。旧制度では小学校2年生までを共学として、3年生以降は教科内容や教科書は別のものという形の男女別学体系であった。

旧制高等学校は男子で占められており、女子の場合は小学校を卒業後に高等女学校に進学すると、旧制中学校と類似の教育が行われていたのである。

女子教育振興のために、国立女子大学を東西2箇所に設置することとされた。お茶の水女子大学と奈良女子大学である。

進学率を戦前と戦後の連続性の上で見ることは出来なくなったが、戦後は義務教育（新制中学まで）の卒業生のうち新制高等学校への進学率は格段の上昇を見せた。1954年には男子55.5%、女子47.4%であったが、1969年には男女ともに79%へと上昇した。2013年には男女ともに96%を超えている。女子の進学率の変化が目覚ましい。

大学の学校数ならびに学生数の推移は表1ならびに表2のとおりである[4]。時を追うごとに教育規模が拡大した事績を読み取ることができる。中でも私立大学が教育の大衆化に多くの役割を果たしたものと見ることができる。

[表1] 大学の校数の推移（単位：校）

西暦年	国立	公立	私立	合計
1949	68	18	92	178
1969	75	34	270	379
1989	96	39	364	499
2013	86	90	606	782

（出所）文部科学省「学校基本調査」

[表2] 大学の学生数の推移（単位：千人）

西暦年	国立	公立	私立	合計
1955	186	25	312	523
1969	302	50	1,003	1,355
1989	505	61	1,501	2,067
2013	615	146	2,108	2,869

（出所）文部科学省「学校基本調査」

1-4 学生登山は変容した

すでに見たように、学校制度は戦後に大きく変容を遂げた。新制大学は質量ともに急速な変化を遂げた。教育の大衆化が一挙に進行したのである。

旧制高等学校の制度は選抜された学生が、全員で寮生活を過ごしながら学びかつ人格を陶冶するというものであったが、このようなエリート養成のシステムは根本から破壊されてしまった。

戦前に登山を行っていた学生は少数の富裕層の子弟が中心であり、当時の学生以外の社会人（勤労者）たちは趣味や娯楽とは縁遠い時代であった。

学生たちの登山活動には強い仲間意識が根底にあり、学生たちは登山技術や固有の気風などを維持し伝承する行動に誇りを持っていた。

戦後には新制高等学校が予備校化すると共に、旧制の様な前期課程を持たない単なる4年制の新制大学となったため、戦前と同様の学生登山は成り立たなくなった。連続性を絶たれたのである。

戦後には、パイオニアワークを目指す学生山岳部への入部者が減少する傾向が強まり、大学の課外活動における登山の分野は大きく変容した。

2. 国が奨励した体育及びレクレーション

2-1 社会教育法の誕生

1949年に社会教育法が公布された。戦後約10数年の間に始まったハイキングや登山の人気上昇に大きな影響を与えた法律であった。文部省が野外活動に取り組みを始めたのである。

占領政策は中央集権を廃し全国の平等化や地方分権を強調した。この政策の一環として公布されたこの法律において「社会教育とは学校の教育課程として行われる教育活動を除き、主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動（体育及びレクレーション活動を含む）をいう。」と定義された。青少年とは19歳以下の者である。

この法律に基づいて設置されたのが市町村の教育委員会である。文部省はレクレーション活動の普及に力を注ぎ、特にキャンプを重点種目としていた。

1951年にユースホステル協会が発足して以来、同協会が主催するサイクリングやキャンプ行事には各地の教育委員会が援助を行っていた。教育委員会が主催する野外活動の種目には、サイクリング、キャンプ、ハイキング、ワンダーフォーゲルなどが多く見られた。

社会教育法が施行されて以来、多くの青少年関係答申が出され、その延長線上に青少年団体活動促進について（1955年）、青少年野外活動の奨励について（1956年）、社会教育関係団体に対する助成について（1959年）などの通達が続いた。表8の年表を参照されたい。

2-2 体育必修化で人気化したワンダーフォーゲル

1949年から新制大学において一般体育（講義）と体育実技が初めて必修課目となった。戦前は旧制高等学校までの必修課目とされていた。

占領政策による指示を受けて、栄養・公衆衛生・体育・レクレーションに関する教育を高等教育段階まで延長したのである。

1949年9月に体育実技の運営方法などについて研究する目的で、慶應義塾大学の体育部の呼びかけによって旧制総合九大学体育研究会が発足した。この研究会は、東京六大学（東京、慶應義塾、早稲田、明治、法政、立教）のほかに、日本、中央、専修が加わっていた[5]。

都市部で多数の学生を擁する私立大学は、施設、用具、教員の不足などを補うために、体育実技の運用について種々の臨時措置を講じワンダーフォーゲルや登山も正式課目として取り扱われた[6][7]。

体育実技の単位を授与するために実施されたのは次の二つの方法であった[8]。

(1) 委託部員制度

体育会に加入している各部の正部員について、当該部長ならびに監督の実技を習得したことの証明をもって大学が単位を認定する。

(2) 認定正課の設定

課外活動のうちの一定の種目を体育実技の正課（正規の教育課程）と認定して、その参加者に単位を与えることができる。

これにより、体育会所属の部が行う野球大会、運動会、ハイキング、ワンダーフォーゲル、スキー、山岳実習などの臨時コースを大学当局が正課と認定し、この参加者に単位を与えた[9]。

後年には国立大学においても登山、ワンダーフォーゲル、ハイキング、野外コースといった企画が体育正課のコースとなり、活動状況が学年末に体育正課の得点の一部として加算されることになった。

全国の大学において、ワンダーフォーゲル部など体育会の各部においては、大学側の要請で監督やコーチを置いて部の規則を制定するなどの組織化が進められた[10][11]。

夏に行われた登山関係の実習コースには100～200名の参加があり、ファイアーを囲むキャンプと、集中登山が人気を呼び、参加者の中からワンダーフォーゲル部への入部希望者が続出した。

3. 大学登山の主流となったワンダーフォーゲル部

3-1 先駆した関東の私立大学

戦後の大学におけるワンダーフォーゲル部の活動は、1964年の明治大学における部の再建から始まった。同部の再建は、創始者であり部長であった春日井薫教授の督励によるものであった[12]。これに呼応して慶應義塾大学[13]と立教大学[14]でも部が再建された。

復活した3大学ワンダーフォーゲル部は戦前の歩行運動から解放されて、真に登山を愛好する同士の集団として再発足したものであった。

続いて中央大学が戦後初のワンダーフォーゲル部を創設した[15]。

表3が示すように、創部の先駆けは関東の私立大学であった。

1951年に東京大学が国立大学で初めて創部[16]し、1955年にワンダーフォーゲル連盟に加入して国立大学におけるワンダーフォーゲル活動の先駆けとなった。国立大学における創部は表4のように全国に普及して、ワンダーフォーゲル部はわが国の大学における課外活動(公認のクラブ活動)の1種目として確固たるものとなった。

この発展の背景となったのは、社会教育法の公布によって急速に普及し始めた青少年の野外活動、ならびに朝鮮特需から始まった景気上昇による国内旅行、登山、ハイキングなどの流行であった。表8の年表を参照されたい。

1969年には表5に示すように、国立大学75校(単科大学を含む)のうち57校にワンダーフォーゲル部が設立されていた。

1954年に女子大学で初めてのワンダーフォーゲル部がお茶の水女子大学に誕生し、次いで1955年に津田塾大学と東京女子大学、1956年に女子美術大学、1957年に奈良女子大学、1958年に大阪女子大学、大阪樟蔭女子大学と創部が続いた。

この当時、大半の大学山岳部では女性の入部を認めていなかったが、ワンダーフォーゲル部では大多数が創部当初から女子の入部を認めていた。

ワンダーフォーゲル部の設立は、全国の高等専門学校、短期大学、高等学校にも波及した。

【表3】 先行した私立・公立大学の創部

西暦年	大学名
1946	明治、慶應義塾
1948	立教、中央
1949	早稲田
1951	法政
1953	横浜市立、日本
1954	東京都立、明治学院、神奈川、中央(2部)

【表4】 国立大学における創部状況

西暦年	大学名
1951	東京
1954	お茶の水女子
1955	北海道
1956	岩手、福井、京都
1957	東北、福島、埼玉、東京工業、横浜国立、奈良女子、広島
1958	新潟、富山、金沢、宇都宮、京都工芸繊維、大阪、神戸
1959	名古屋、京都教育、大阪外国語、大阪学芸
1960	室蘭工業、山形、一橋、東京学芸、東京教育

【表5】 全国大学のWV部創部状況(単位:校)

西暦年	国立	公立	私立	合計
1946～1949	−	−	5	5
1950～1959	24	8	40	72
1960～1969	32	9	43	84
1970～1979	1	−	4	5
合計	57	17	92	166

(出所) 筆者の調査[17]による(表3、4、5とも)。

初期に設立したワンダーフォーゲル同好会やワンダーフォーゲル部は、創設した後に体育会への加入承認を得て活動予算を獲得するまでの間に、他の部からの加入反対論に苦心した。

また新設種目であるため、各部はテントなどの共同装備の新規購入資金や活動資金の調達のために、当時人気が高かった映画会やダンスパーティーを開催した。

対外的にワンダーフォーゲル部の認知を得るため、大学祭、文化祭への写真展示参加や公開ワンデルングを開催する部が多く見られた。

1950年代には全国の大学においてワンダーフォーゲルとはなんぞやという議論が盛んに行われていた。本質論[18][19]とも呼ばれた。各大学の部誌の巻頭には、必ずといってよいほど本質論に

関する記事が掲載されていた。

山岳部との相違などを理論武装するという含みであり、換言すればワンダーフォーゲルという新しい登山文化を創造するための力強い活動でもあったと思われる。

大学ワンダーフォーゲル部は、日本山岳会に団体加盟するものは少なかった[20]。従ってOBたちも入会する者は少なかったようだ。一方の大学山岳部は、戦前、戦後ともに日本山岳会に団体加盟し、卒業後のOBはその多くが個人会員として入会して日本山岳会を支えてきた。

3-2 東京大学が主導した全国への普及

東京大学ワンダーフォーゲル部の創設以後の活動は、わが国の大学における課外活動の中にワンダーフォーゲル部という新規種目を定着させるまでの大きな先導的な役割を果たした。

ワンダーフォーゲル部の創設は明治大学が先鞭をつけ、東京大学が国立大学の先導者となった。以後、燎原の火のごとく全国の国立大学にワンダーフォーゲル部が創立され認可されていった。

終戦直後の旧制総合九大学体育研究会[21]に参加していた東京大学においてワンダーフォーゲル部が誕生し（本郷）、その後に学生ワンダーフォーゲル連盟にオブザーバーとして参加。翌1952年に全学的サークルとなり、1955年に全日本連盟に加盟。1957年に運動会（他の大学では体育会）加入申請したが否決。1958年は部員200名を超え、1960年にOB会を発足させた。山小屋建設の資金集めが、OB会発足の契機となった。1961年に3回目の申請でようやく運動会への加入が承認された。

同年に発行された冊子「東京大学ワンダーフォーゲル部紹介――私達の活動を理解して頂くために」[22]は、冒頭に5ページを割いてワンダーフォーゲルの本質論を説いていた。同部の50周年誌には次のような座談会の記事が残されている。「運動会加入の申請にいったときも、総務でやられたのは定義の問題。山岳部とどう違うか、垂直山岳部じゃないか、とか軟式山岳部じゃないか、運動会に二つの部を養っていくだけの余裕がない、そういう議論だったんですよ」[23]と。

3-3 創立の動機を見る

学生登山の新潮流を起こすに至った数多くのワンダーフォーゲル部の発足の動機を調査すると、大まかに次の二つに区分することができる。

(1) 山岳部から派生して独立し、あるいは山岳部とは異なる姿勢で山を愛好する者が新たに集まって発足したものである。アルピニズムや冒険主義からの分化であり、わが国の学生登山の歴史の上で特筆されるべき事柄であった。

(2) 青少年の野外活動が流行した影響によって発生したものである。この当時は青少年を中心としたキャンプやサイクリングが流行し始めた時代であった。ユースホステル協会やYMCAなどが行っていた野外活動は、全国の自治体の教育委員会などが援助していた。これらの影響によって設立された大学のワンダーフォーゲル部は、設立後に各地区の学生ワンダーフォーゲル連盟に加盟して活動の重点を次第に登山活動に移していった。

上記(1)の区分にあたる例として金沢大学ワンダーフォーゲル部の設立に至る経過を紹介しよう。同部は1958年に山の会から分かれて設立された。設立当初のクラブ員数は47名であった。

部誌『Bergheim』創刊号の巻頭言[24]に次のように記されている。

「本学には前から山の会と称する学生の課外活動の団体があって、山を愛する同志が集まり座談会を開いたりスポーツとしての登山を楽しんでいたが、去年の五月の総会で改組され、会名を山岳部と改め、行事目標も新名称に相応しく本格的で高度な登山技術の修得と鍛錬に重点を置くようになった。ところが、従来の会員にはそうした高度なものでなく、軽装で気軽に楽しめる近山の遊遇や、自然に親しむハイキング或いはサイクリングに興味を有するものが少なくなく、これらは新しい山岳部について行けなくなり、袂を分かって新たな団体を形成する必要が生じてきた。このように生まれるべくして生まれたのがワンダーフォーゲルクラブである。」

3-4 ワンダーフォーゲル独自の山小屋建設へ

ワンダーフォーゲル部独自の山小屋建設はわが国で初めての事業であった。

明治大学のワンダーフォーゲル部では、春日井教授（部長）の尽力によって大学からの建設助成金を得てワンダーフォーゲル部独自の山小屋を建設した[28]。同校の山小屋の建設は、ワンダーフォーゲル部長に就任する直前まで山岳部の部長を務めていた同教授[29]のワンダーフォーゲル部育成構想の一環であったものと考えられる。山小屋の建設を契機として同校にワンダーフォーゲル部OB会が結成された。

国立大学における小屋建設も東京大学が先駆けであった。これもまた、大学ワンダーフォーゲルの発展史の中で時代を画する事柄の一つとなった。

[表6] 山小屋の建設状況

西暦年	国立・公立	私立
1954 ～ 1959		明治、中央、慶應義塾、工学院
1960 ～ 1969	東京、金沢、東京都立、横浜市立、名古屋、東京工業、横浜国立、大阪外国語、神戸、京都	日本、立教、東海、立命館、関西学院、関東学院、上智、早稲田、天理、青山学院、関西、明治学院、学習院、武蔵工業、東京薬科、国学院

（出所）筆者の調査[27]による。

各大学にとって山小屋の建設は、OB会の結成とその後の部活動隆盛への一大契機となった。山小屋を持つワンダーフォーゲル部では、その後も伝統的に部の山小屋合宿を伴う登山を中心とする活動が続き、ワンダーフォーゲル部の伝統が構築される礎になったものと考えられる。

3-5 夏季合宿を中心とした年間活動

各大学のワンダーフォーゲル部は何れも夏季合宿を中心とした年間計画に基づいて活動していた。夏季合宿は7日間から15日間程度の規模であった。この他に新入合宿、春合宿、秋合宿などが織り込まれた年間計画が各大学において伝統的に実行されていた。

各部とも部員数が多かった時期には10名内外を1班として、各班にリーダー他の係を定めて活動した。女子隊[30]や女子班[31]を編成する部も見受けられた。

冬季の登山を禁止する部もあった[32]。

大学合同ワンデリング（以下、合ワン）が地域ごとに企画されて人気を集めた。合ワンには、四大学合ワン（明治、慶應義塾、中央、日本が1958年から開始して1994年までほぼ毎年続けられ縦走登山を行う定期合ワンの代表的なものと言われていた）など多数の交流合ワンがあった。

部員数が隆盛をみたのは表7に見られるように1950年代前半から1960年代後半の間であった。

[表7] 部員数の推移（単位：人）

西暦年	大阪	金沢	神戸	明治	慶應
1946	—	—	—	35	63
1956	—	—	—	95	215
1966	338	63	110	103	198
1976	150	65	60	62	34
1986	75	38	48	58	

（注）筆者の調査[33]による。

1969年頃には体育離れが全国的に起きて体育会各部の部員減少がはじまった。組織離れとも言われ、同好会が続出した。年功序列、上下関係、団体訓練、精神論などが忌避されたと言われる。

1970年代から部員数の減少に対処するために活動内容の多様化を進める部が増加した。

体育会系の部活動を避けて続々と結成された同好会やサークルを認可して、活動補助金を支給する大学も増加していった。

3-6 ワンダーフォーゲル連盟

関東、関西などの各地区で結成された学生ワンダーフォーゲル連盟の主な役割は、初期の間は部の創設勧誘や設立指導ならびに情報交換が主なものであったが、後年には主として地域内の部相互の交流を目的にしたものに変化していった。

最も早く結成された関東地区の連盟は、ワンダーフォーゲルの普及を目的として、名称を全日本学生ワンダーフォーゲル連盟とした[34]。中央大学がワンダーフォーゲル部（部顧問・福井正吉氏）が事務局となり、関東の諸大学に対してワンダーフォーゲル部の創設を勧める活動を行った。

次いで結成された関西の連盟[24]は、関西大学

ワンダーフォーゲル部（顧問・大島謙吉氏）の主導により青少年育成運動の一環として国の助成を得ることを企画していた。

その後の全国各地連盟の結成状況は表8の大学ワンダーフォーゲル年表を参照されたい。

各連盟の結成当時の加盟校は、関東と関西の連盟では私立大学が中心であったが、他の地区の連盟では国立大学が中核となって結成されていた。

1959年に全日本学生ワンダーフォーゲル連盟（以下、全日本連盟）が発足した[35][36]。関東の連盟と関西連盟の結合によるものであった。東北学生ワンダーフォーゲル連盟と北陸三大学ワンダーフォーゲル連盟は加盟しなかった。全日本連盟の会長には当時の文部大臣・橋本龍伍氏が就任した。全日本連盟顧問に就いた大島謙吉氏（文部省青少年教育分科会委員など）の推挙によるものであったと見られる。次代の会長には茅誠司氏（東京大学総長）が就任した。

全日本連盟は、8年間にわたり大規模な全国合ワンを実施して人気を集めた。

この当時は、全国的に社会教育関係団体への国の助成や補助が活発になっていた。連盟内部には文部省からの青少年育成関連助成金を受給することや運営方針に対して、国立大学ワンダーフォーゲル部を中心として多くの異論があった。青少年や社会人を含むワンダーフォーゲルの組織化の構想は、独立・自主を掲げる大学生に受け入れられず、また大規模な全国合ワンに対しても批判があり、全日本連盟は1966年に解散した[37]。

3-7 OB会の隆盛と50周年記念誌の発行

国立大学をはじめ多数の大学においてワンダーフォーゲル部OB会が活躍を続けている。大学の課外活動の中では異例の大部員数を誇っているようだ。次にいくつかのOB会員数を紹介してみよう[38]。（カッコ内は発表年）

大阪大学530、九州大学500、神戸大学600、東京学芸大学420（以上2010年）、西南学院大学400、明治大学1,253（以上2011年）、中央大学882、鳥取大学357（以上2012年）

すべてのワンダーフォーゲル部が山岳部と同様に部報（月刊または季刊）を発行し、多くの部が部誌[39]（年刊）を発行していた。

初期に発行したワンダーフォーゲル部は200ないし300部を発行し、他校との交流にも利用していたが、1970年代には発行する部が少なくなり、現在まで発行が続いているワンダーフォーゲル部は少数となっている。

部誌と部報などの膨大な記録を基にして、創立50周年記念誌が続々として発行された。全国の伝統ある各部が創立以来積み上げてきた詳細な実録は、戦後時代の学生登山の姿を映し出す歴史資料として、また19世紀に出現した新しい学生登山現象の記録として残されてゆくに違いない。すでに国立国会図書館にもその多くが納められている。中でも慶應義塾大学、明治大学、東京大学のものは、創部以来のすべての山行履歴がまとめられており、まことに貴重な記録集だと思われる。

発行された創設50年以上の周年記念誌または部誌の周年特別号を発行した30校のリストは、注記46）として紹介したので参照されたい。

3-8 大学ワンダーフォーゲル部が発展した要因

ワンダーフォーゲル部が大学の課外活動の中において、山岳部とは別の登山クラブとして登山活動の主流を歩むようになった要因を、発足以来今日までの活動の足跡から取りまとめてみた。

1. 戦後の明治大学における設立と体育会加入認可（山岳部に入らなくても登山ができる）
2. 体育課目必修化により体育実技の正式課目に認定された（キャンプが人気を呼んだ）
3. 関東の学生ワンダーフォーゲル連盟結成と創部の勧誘活動
4. 東京大学の創部と連盟加入（国立大学初）
5. 青少年の野外活動普及の影響（教育委員会、各種青少年育成団体、ユースホステル協会の活動）
6. 全国の国立大学における課外活動種目としての認可（体育会など）
7. 合ワンによる情報交換と交流活動
8. OB会の結成と山小屋の建設（資金援助や技術指導など）

などの事項を挙げることができる。

3-9 戦前の二つのワンダーフォーゲル

戦前のわが国に2種類のワンダーフォーゲルが

あったことはあまり知られていない。

勤労者のワンダーフォーゲルと大学生のワンダーフォーゲルがあった[40][41]。

(1) 勤労者の奨健会ワンダーフォーゲル

勤労者（社会人）を対象として結成されたのが奨健会ワンダーフォーゲルであった。

これを主宰していた財団法人奨健会は、文部省体育課に事務所を置いて勤労者の体育・スポーツを振興する事業を行っていた。1933年に同会の内部にワンダーフォーゲル部を設立して歩行奨励運動を開始した。同部を設立し指導したのは、奨健会主事の出口林次郎氏であった。

奨健会の歩行運動をワンダーフォーゲル運動と命名した由来について、出口氏は著書『ワンダーフォーゲル常識』[42]の中において、歩行奨励運動を推進するにあたって、国民に呼びかけ易い運動名称としてドイツのワンダーフォーゲルの名を使用した旨を説明している。この書物の他には日本におけるワンダーフォーゲル命名の由来に触れたものは見当たらない。

歩行奨励運動がワンダーフォーゲル運動と命名された当時は、明治時代以来わが国民の中にドイツに対する憧憬や親愛の空気が根強く抱かれていた時代であった。

当時、奨健会がワンダーフォーゲル運動を開始するにあたっては、ドイツのワンダーフォーゲルに関連する諸機関や団体との連携などは一切なかったものと見てよいだろう。また大学生のワンダーフォーゲルについても、ドイツのワンダーフォーゲル関連団体との連携などに関する記録は見当たらない。

勤労者のための奨健会の歩行運動は、太平洋戦争中にその使命を終えて消滅し、戦後は復活することがなかった。

(2) 大学のワンダーフォーゲル部

奨健会ワンダーフォーゲルに続いて発足した大学生のワンダーフォーゲルの起源となったのは、1928年に発足した明治大学の駿台あるこう会であった[43]。1935年に、奨健会ワンダーフォーゲルに参加していた学生たちによって、慶應義塾大学[44]と立教大学にワンダーフォーゲル部が誕生した。

翌1936年に駿台あるこう会が奨健会の出口氏の勧誘によって明治大学ワンダーフォーゲル部と改称して組織立てを行った[43]。3校で学生ワンダーフォーゲル連盟を結成して大学ワンダーフォーゲル部の活動が本格化した。明治大学ワンダーフォーゲル部は体育会に加入したが、慶應義塾大学と立教大学は文化会に所属した。太平洋戦争の期間中は勤労動員や戦地への出征によって部活動が休止状態に追い込まれた。

駿台あるこう会は、春日井教授が主宰して、ゼミナールと指導クラスの学生と日曜日毎に近郊を歩き語り合うという師弟の会であった[45]。

4. 新しい登山現象の発生であった

以上に述べてきたように、戦後の約25年間（昭和時代）の大学のワンダーフォーゲル部の活動は、戦前にはなかった新しい登山形式が青少年野外活動の普及と同期しながら、大学の体育系課外活動の中における登山活動の主流として定着した現象であったと認められる。

山岳部が持っていたカラーをチャンピオンスポーツと呼ぶならば、ワンダーフォーゲル部のカラーはレクレーションスポーツの一種だと呼ぶことができる。このような現象は従来から言われてきた大衆化という概念だけでは捉えきれないものであり、大衆化とは異質の登山現象であったと見ることができる。

大衆化と呼ばれるものは、目的や様式が同類の趣味などが特定の階層から次第に大衆層に広がることを指すのが一般的である。しかし戦後の大学ワンダーフォーゲルの生成発展現象は、ごく短期間に経済の急成長を遂げた時代に、急激な社会改革によって国民の富の総中流化が進み、教育制度の変更によって階層意識の平等化が拡がり、価値観の多様化が進行する社会において、大学教育の中に一つの種目として発展し、新しい登山文化を形成したものであったと考えることができる。

平成時代（1990年以降）の大学におけるワンダーフォーゲル部の活動状況については、稿を改めて報告したい。

（受付　2013. 4.30）
（査読後受理 2013.10.18）

［表8］ 大学ワンダーフォーゲル年表

西暦	和暦	ワンダーフォーゲル（WV）部の活動	時代背景
1945	昭20		太平洋戦争終結 GHQ「教育制度ニ対スル管理政策」指令
1946	昭21	明治大学 WV 部復活 慶應義塾大学 WV 部復活	新憲法公布　財閥解体令　農地改革 雑誌『山と渓谷』復刊
1947	昭22		教育制度改革（6.3.3.4 制、男女共学） 国体で山岳競技開始　雑誌『岳人』創刊
1948	昭23	立教大学 WV 部復活、中央大学 WV 部創設 関東地区学生 WV 連盟結成、連盟合ワン開始 明治大学 WV 部に女子入部	新制高等学校発足 大学山岳部が海外遠征を開始
1949	昭24	大学で WV 部活動を単位授与の正式課目に認定	新制大学発足　体育が必修課目となる 社会教育法公布（レクレーションを推進）
1950	昭25		朝鮮戦争特需景気起こる 国内旅行やキャンプが流行、登山者が増加
1951	昭26	東京大学 WV 部創設 WV 部でスタンツとキャンプソングが流行 慶應義塾大学 WV 部 OB 会発足	講和条約締結（占領時代終わる） ハイキングが流行 日本ユースホステル協会発足
1954	昭29	お茶の水女子大学 WV 部創設立 明治大学 WV 部が山小屋建設	青少年のサイクリングが流行
1955	昭30	東京大学 WV 部が学生 WV 連盟に加盟 WV 部の設立が全国大学に波及、部数が急増	神武景気始まる
1956	昭31	全国大学で WV が課外活動の公認クラブに	文部次官通達「青少年野外活動の奨励について」 日本（槇隊）マナスル初登頂 社会人登山者が急増 スキー全国普及始まる、山の映画盛況
1957	昭32	関西学生 WV 連盟結成 東北学生 WV 連盟結成	ユースホステル全国に普及 青少年キャンプ流行
1959	昭34	全日本学生 WV 連盟結成、　全国合ワン開始 北陸学生 WV 連盟結成	マイカー普及始まる 国立青年の家設置開始
1960	昭35	東京大学 WV 部 OB 会発足	国民所得倍増計画発表される
1962	昭37	東海学生 WV 連絡会結成 中・四国学生 WV 連絡会結成	
1964	昭39	北海道学生 WV 連盟結成、 九州学生 WV 連盟結成 東京大学と金沢大学が WV 部山小屋を建設	東京オリンピック開催 東海道新幹線開通 深田久弥『日本百名山』刊行
1966	昭41	全日本学生 WV 連盟解散	
1968	昭43		東京大学ほか全国の大学で紛争多発
1969	昭44	WV 部の活動内容の多様化が進む	体育離れ現象始まる 同好会・愛好会が続発
1973	昭48	WV 部活動日数・回数減少へ	高度経済成長終息
1989	昭64	日帰り企画が増加	昭和天皇崩御

[引用文献・注記]

1) 文部省：戦後の教育改革、学制百年史・総説6、帝国地方行政学会、1973、p.30
2) 前掲書1)、p.33
3) 前掲書1)、p.35
4) 平成25年度学校基本調査 年次統計、文部科学省、2013
5) 佐藤隆：明治大学正課体育の歴史、明治大学教養論集、333、明治大学、2000、p.9
6) 慶應義塾大学体育部：慶應大学 正課体育の現況、体育、第2巻第6号、金子書房、1950、p.56
7) 前掲5)、p.11
8) 前掲5)、p.13
9) 前掲5)、p.60
10) 座談会で語るTWVの50年、TWVの50年、東京大学WV部、2001、p.32-33
11) 運営体制の変遷、50年史、大阪大学WV部、2001、p.217
12) 戦後のMWV 三十年のあゆみ、明治大学体育会WV部、1966、p.30-40
13) ふみあと—KWV50周年記念特集号、慶應義塾大学WV部、1986、p.21
14) 部史—創立50周年記念、立教大学WV部、1987、p.43
15) 遍歴—40年の歩み、中央大学WV部OB会、1991、p.392
16) 前掲10)、p.22-24・304
17) 城島紀夫による大学WV部に関する総合調査。本調査は、大学のWV部や同OB会が発行した部誌、部報、周年記念誌、ならびに学生WV連盟機関誌、WV部OB会報を収集または閲覧して行った。
18) 前掲10)、p.37-40
19) 大東英祐：ワンダーフォーゲル運動「本質論」の変遷、前掲10)、p.178
20) 中村純二・五十嵐一晃：学校山岳部の発足、日本山岳会百年史・続編、2007、p.111-124
21) 前掲5)、p.9
22) 東京大学ワンダーフォーゲル部紹介—私達の活動を理解して頂くために、東京大学WV部、1961、p.4-6
23) 前掲10)、p.38
24) 鈴木広芳：部誌発刊に際して、Bergheim、創刊号、金沢大学WV部、1959、p.1
25) 前掲10)、p.46
26) 並河清：京大ワンダーフォーゲル部創立の頃、水行末雲行末風来末、創刊号、京都大学WV部、1958、p.6-7
27) 50年史、大阪大学WV部、2009、p.13-15
28) 前掲12)、p.90
29) 体育会略史・歴代体育会各部部長一覧表（添付資料）、明治大学体育課、1982
30) 前掲10)、p.4
31) 六十年のあゆみ、明治大学体育会WV部、1997、p.182-189
32) 前掲31)、p.290
33) 前掲17）に記した調査資料に基づき入部した部員数、卒業した部員数などから、筆者が年次ごとの部員数を推計したもの。
34) 福山秀臣：ワンダーフォーゲル小史、ワンダーフォーゲル年鑑、創刊号、全日本学生WV連盟、1960、p.14-15
35) 前掲34)、p.18
36) 吉田修：全日本学生ワンダーフォーゲル連盟、六十年のあゆみ、明治大学WV部、1997、p.273
37) 前掲36)、p.274
38) 前掲17)
39) 城島紀夫：日本ワンダーフォーゲルの起源と歴史、日本山岳文化学会論集、7、2009、p.25-26
40) 城島紀夫：ワンダーフォーゲル概史（前篇）、山岳文化、8、2008、p.39-49
41) 城島紀夫：前掲40)、p.39-40
42) 出口林次郎：ワンダーフォーゲル運動の総括的定義、ワンダーフォーゲル常識、ワンダーフォーゲル精神普及会、1935、p.6
43) 春日井薫：ワンダーフォーゲル回顧録、三十年のあゆみ、明治大学体育会WV部、1966、p.12-16
44) 中村正義：創立のころ、ふみあと、15、慶應義塾大学WV部、1960、p.17-19
45) 前掲44)
46) 50年以上の周年誌、部誌周年記念号一覧
①慶應義塾大学WV部：ふみあと—KWV50周年記念特集号、1986
②立教大学WV部：部史—創立50周年記念、1987
③明治大学体育会WV部：六十年のあゆみ、1997
④法政大学体育会WV部：創部50周年記念誌、1999
⑤東京大学WV部：TWVの50年、2001
⑥日本大学WV部OB会：創部50年記念、2003
⑦横浜市立大学鵬嶺会：峠—YUWV50周年記念号、2003
⑧国学院大学WV部OB会：野づら—創部50周年記念号、2004
⑨明治学院大学体育会WV部：MGWV 50th

Anniversary、2004
⑩女子美術大学ＷＶ：草鞋、29、2005
⑪福井大学ＷＶ部：FUWVの50年、2005
⑫北海道大学ＷＶ部OB会：道標―創部50周年記念誌、2005
⑬関西大学WV OB会：千里―創部50周年記念号、2006
⑭関西学院大学体育会ＷＶ部：記録―五十年のふみあと、2006
⑮東海大学体育会ＷＶ部：50周年記念誌、2007
⑯横浜国立大学ＷＶ部・同OB会：YWV50年の歩み、2007
⑰大阪市立大学ＷＶ部OB・OG会：径―50周年記念誌、2008
⑱京都府立大学鴨深会：深―創部50周年記念特別号、2008
⑲上智大学 WV 部：はばたき―創部50周年記念号、2008
⑳成蹊大学 WV 部：創部五十周年記念誌 石楠花、2008
㉑大阪大学ＷＶ部：50年史、2009
㉒大阪外国語大学 WV 部OB会：Viator―創部50周年記念特別号、2009
㉓中央大学 WV 部OB会：遍歴Ⅱ―60周年誌、2009
㉔名古屋大学体育会ＷＶ部：NUWV50周年記念誌 ふみあと、2009
㉕日本大学医学部ＷＶ部：創立50周年記念誌 旅の仲間たち、2009
㉖山形大学ＷＶ部OB会：我らワンダラーの50年記、2009
㉗早稲田大学稲門ＷＶ会：創立60周年記念誌、2009
㉘神戸大学ＷＶ部：創部50周年記念誌、2010
㉙西南学院大学ＷＶ部OB会：路―50周年記念号、2011
㉚東京学芸大学ＷＶ部OB会：雪筐―TGWV創部50周年記念号、2011